

休心、乱心、そぞろ 歩きの木の芽どき



東江一紀

力って、やっぱりすごい。この歳になっても、まだハングリーでいられるというのは、寿ぐべきことである（かなあ）。

しかし、長い蟄居のあいだに、どうやら、わたし、人間的にもひと回り大きくなったみたいで、特に中半身の成長が著しい。えくん、なんでハングリーなのに太るんだよお！

よし、久方ぶりに、散歩に出かけようっと。あらら、里はすっかり春じゃやないの。菜の花が一面に咲いて、桜はちょっと盛りを過ぎてますね。

そういや、桜花賞は取り損ねたなあ。武豊のフアレノプシスなんて、買えないよ。ロックラヴウインクとバプティスタで、めでたく万馬券の予定だったのに……。

でも、今年は、万馬券を二回取っている。どっちも百円ずつですけどね。お年玉年賀はがきは、十万分の一の確率の二等賞を当ててしまった。

この分でいくと、横浜ベイスターズ三十八年ぶりの優勝も、夢でなくもないような気がしないでもない。わたしの訳書も、ひよっとしたら、絶対に売れないと言いきってしまいうわけにもいかないかもしれないような状況に立ち至らないともかぎらなくもない（↑何重否定だ？）

などと、すこぶる非生産的な思考を巡らせ

去年の暮れから並行して進めてきた四冊の本が、ここひと月ほどのあいだに立て続けに訳了して、ほんのちよっぴりだけど、時間に余裕ができました。

まあ、ごく普通の超多忙モードに戻ったというだけの話ですけどね。とりあえず、未訳の原書の山が少し低くなり、きつい締切りの

仕事がほぼかたづいて、これからしばらくは、目の前にある本を一冊ずつじっくりと訳していけばいい。

ええっと、一、二、三……七、八、九……

あと十四冊か（数えなければよかった）。

いやあ、それにしても、よく働いたなあ。

いつ壊れてもおかしくなかったぞ。生活苦の

つつ、気分は軽く、体は重く、うちから二分ほど歩くと、もう田園のまっただなか。

そういうや、昔、「田園ふうの調布に住んでます」とうれしそうに言っていた調布在住の編集者がいたなあ。株に入れ込んでいたけど、このたびのトリプル安を、うまく切り抜けたらたんでしようか。

農道沿いに、溝と呼んでもいいほど細い川が流れていて、近くのもっと大きい川から、しよっちゅう鷺が飛んでくる。この溝みたいな川に、たぶん、エサがたくさんいるんだと思います。

そういうや、去年の夏、五歳の息子とここを歩いてたら、ザリガニがうようよ泳いでいたなあ。息子が大声で、「お父さん、ザリガニが百人以上いるよ」と叫んだものでした。

きょうは、鷺だけじゃなく、鴨まで飛んできています。しかも、この人たち（そう、鳥だって人間なんです）、物怖じすることを知らない。わたしがすぐそばを歩いて、逃げるところか、まったく無視して、えばった顔で道を横切るんです。

そういうや、ここの辺の鷺と鴨って、やたら仲がいいんだよなあ。普通、サギといたら加害者で、カモといたら被害者でしょう。その両者が、互いを認め合い、共存し合っている光景を見ると、わたしはなんだか、騙さ

れているような気分になるのであった。

そういうや、去年夏の散歩で、大きいほうの川に、生まれたての鴨のひなを四羽見つけたなあ。しばらくのあいだ、毎日、カメラを手に追っかけていたもんです。鴨にしてみりゃ、いい迷惑だ。ストーカーですよ。

しかし、東京もまだ捨てたもんじゃやない。町田近辺には、自然が腐るほどある（なにせ、防腐剤を使つてませんから）。このちよつと先には、原始そのままの広大な森が……。

と思つたら、うわっ、森がない！ どうしちゃったの？ ぐるっと柵が巡らされて、一面むき出しの土の上を、ブルドーザが走り回っている。迷い込んだら二度と出てこれない気がするぐらい、深い深い森だったのに、今はあえなく平らになって、ずうつと向こうまで見通せるではないか。

もしかすると、わたしの記憶にある森は、幻だったんでしようか。うん、シヨック。なんだか悲しい。もつたいない。そりゃあ、もちろん、わたしが今住んでいる一郭だつて、同じようにして開発されてきたのだろうから、こんな気持ちはいだくのは、身勝手な感傷というべきかもしれないが……。

無残、という思いがする一方で、しかし、造成工事の圧倒的な迫力、活力に、見惚れて陶然とするわたしもいるのだった。

ふと思いついて、家に取って返し、息子を呼んできた。こいつ、工事現場を見るのが大好きなんです。

「木が倒されて、かわいそうだね」などと、たぶんどこかで刷り込まれてきたせりふを口にした、その舌の根も乾かないうちに、「あ、オフロード・ダンブ！」「あ、大きいパワーシヨベル！」と興奮しまくっている。

たしかに、力強くむだのない動きで、土が掘り起こされ、山が切り崩されていくさまは、見ていて飽きない。つい感動してしまおう自分と、それを罰当たりなことと思う自分がいて、なかなか複雑な心境ですね。

二、三年もすれば、ここに大住宅地ができあがるだろう。都内にしては異様なほど人口密度の低かったこの地区も、にぎやかで便利なシティーに昇格しちゃうんですかねえ。

ま、先回りしていろいろ考えるのは、とりあえずやめといて、土日の中山のレース検討に気持ちを集中するとしましょう。

わが身にこの先何が起るのかはまったく予想がつかないけど、何が起らないのかは結構わかる。

わたしが二十歳の大学生に戻ることはないだろうし、絶版になった本の印税が入ることもないだろう。そして、買わない馬券で懐が潤うこともない。